「令和2年7月豪雨災害」に対する徳島赤十字病院の救護活動

1. 被害状況について

令和2年7月3日から14日にかけて、梅雨前線が本州付近に停滞し、西方と南方から流入する大量の水蒸気が、九州を中心に西日本から東日本にかけて集まりやすい状態が続いたため、広い範囲で大雨となった。

3日から8日にかけては、九州地方で多数の線状降水帯が発生し、熊本県南部を流れる球磨川が氾濫するなど九州各地が甚大な被害に見舞われた。

特に被害の大きかった熊本県の被害状況は次のとおり

■熊本県の被害状況

死者65名、行方不明者2名、住家全壊223戸、半壊360戸、一部損壊440戸、床上浸水5,594戸、床下浸水2,213戸（令和2年8月4日現在）

2. DMATの活動

7月8日夜に厚生労働省DMAT事務局から熊本県への派遣要請を受け、経営部及びDMAT隊員の所属長に派遣の許可を得て派遣が決定。翌朝の7月9日に熊本県へ向けて出発するため、メンバーの人選、資機材の準備等を開始。

DMAT隊員の救護服を準備

医師・看護師が使用する医療資機材

業務調整員が使用する事務用品

医療資機材の確認を行うDMAT隊員

日本赤十字社 Japanese Red Cross Society　徳島赤十字病院

■派遣の概要

・派遣期間　　令和2年7月9日（木）～7月12日（日）
　　（現地での活動期間は、7月10日～12日）
・派遣先　　熊本県人吉市
・派遣メンバー　医師1名・看護師2名・業務調整員2名　（5名）
・主な活動　　人吉・球磨医療圏保健医療調整本部での本部支援活動
　　球磨病院・人吉医療センターでの病院支援活動等
・移動手段　　公用車1台

■7月9日　病院出発

出発前には、後藤院長の激励の言葉に応え、吉岡勇気医師が「隊員の体調管理に十分留意し、安全第一で精一杯活動して参ります。」と決意を述べ、陸路にて熊本県へ出発。

後藤院長から激励を受けるDMAT隊員5名

資機材を積み込み熊本県へ出発

■7月10日　球磨病院支援・保健医療調整本部での活動

人吉・球磨エリアの保健医療調整本部のある人吉保健所に到着し、同本部で人吉市にある球磨病院の病院支援を行うよう指示を受ける。

同病院は1階が約2メートルの高さまで浸水する甚大な被害を受け、入院患者や人工透析ができなくなった患者を別の病院に搬送。また病院職員約250人のうち95人が被災し、32人が出勤できずにいる状況で支援が必要とのことであった。

DMATチームは、2班に分かれて活動を開始。看護師は病棟の看護支援、医師と連絡調整員1名は保健医療調整本部で被害状況の把握や今後の方針について協議し、各種対応を行った。

浸水被害を受けた球磨病院

本部活動を行う医師と連絡調整員（中央）

■7月11日・12日　球磨病院・人吉医療センター支援、保健医療調整本部活動

保健医療調整本部から、球磨病院に加え人吉医療センターの看護支援について指示を受けた。

人吉医療センターは、人吉市に3つある救急病院のうち、被害を受けた2病院が救急外来を停止しており、同センターへの傷病者の受け入れが集中し、職員の疲労もピークに達していることから支援を必要としているとのことであった。

7月12日も球磨病院、人吉医療センターでの活動を午前中行った後、後続の支援部隊へ引き継ぎを行い、活動終了。午後、陸路にて人吉市を出発し、深夜に当院へ全員無事に帰院し、任務を終えた。

甚大な被害を受けた人吉市内

懸命な復旧作業が続く球磨村

3. 医療救護班の活動

今般の豪雨災害は被害が甚大であったため、九州ブロックの日赤県支部のみでは対応が困難であったことから、日本赤十字社として切れ目のない医療活動を実施するため、中国・四国ブロックの日赤各県支部が順次救護班を派遣することとし、徳島県支部より派遣要請があり医療救護班1個班の派遣が決定。

■派遣の概要

・派遣期間　　令和2年7月19日（日）～7月24日（金）
　　（現地での活動期間は、7月20日～23日）
・派遣先　　熊本県芦北町
・派遣メンバー　日本赤十字社徳島県支部医療救護班　1班　（12名）
　　医師3名・看護師5名・薬剤師1名・救護主事1名
　　徳島県赤十字血液センター　連絡調整員1名
　　日本赤十字社徳島県支部　　連絡調整員1名
・主な活動　　避難所の巡回診療や救護所での医療活動、避難所アセスメント活動等
・移動手段　　公用車3台

■7月19日　病院出発

出発前には、庄野副院長兼看護部長の激励の言葉に応え、米田龍平班長（医師）が「赤十字医療救護班としての自覚を持ち、被災された方の心に寄り添い、最後まで切れ目ない医療救護活動を精一杯実施して参ります。」と決意を述べた。救護班は日赤徳島県支部にて連絡調整員2名と合流した後、ブリーフィング及び救護班出発式を行い、車両3台で陸路にて熊本県へ向けて出発。

熊本県へ派遣した救護員10名

医療資機材を積み込む救護員

■7月20日　日本赤十字社熊本県支部での到着報告

日本赤十字社熊本県支部で到着報告を行い、被害状況や日赤救護班の活動状況等の説明を受けた後、今後の活動詳細については芦北・水俣エリア保健医療調整本部で指示を受けるよう説明があった。

熊本県支部で到着報告を行う救護班

熊本県支部で活動場所等について打ち合わせ

芦北・水俣エリア保健医療調整本部（水俣保健所）に到着後、打ち合わせを実施。その中で活動予定の芦北町の被害状況等の説明を受け、避難所である「芦北地域活性化センター」で巡回診療を行うよう指示があった。

芦北・水俣医療調整本部での打ち合わせ

地域活性化センターで管理者から避難所の状況について情報収集する班長

■7月21日　芦北町での救護活動

芦北町吉尾出張所での巡回診療と避難所アセスメントを行うよう指示を受けた。出張所では、仮設診療所を開設し、防災無線の呼びかけで受診希望の住民が訪れ、健康面に不安をかかえる方や、薬の処方を希望される方たちの診療を行った。

芦北町吉尾出張所で仮設診療所を開設

診療に備え医療資機材を準備

■7月22日　芦北町での救護活動

熊本県医師会救護班に同行して、芦北町3カ所の避難所の巡回とアセスメントを行うよう指示を受けた。地域の復興にあわせ、日赤救護班の役割や医療業務を地域医療にお返しするため、地元の救護班と連携して活動を行い、情報共有や意見交換を行った。

避難所のコロナ対策について確認する救護班

地元医師会の医師と避難所の生活環境を確認

■7月23日　救護活動終了・熊本県支部へ活動報告

芦北・水俣エリア保健医療調整本部の災害医療コーディネーター（医師）に活動終了を報告後、日本赤十字社熊本県支部で活動を報告。芦北町での活動内容や避難所等の状況について説明を行ない医療救護班としての活動を終えた。

熊本県支部で活動報告を行う救護班

救護活動の振り返りを行う救護班

■7月24日　病院到着

医療救護班10名は任務を終え、午後に帰院。今回は新型コロナウイルス感染症に配慮しながらの活動であったことに加え、最後の救護班として医療活動を地域へお返しするという任務が初めての経験であり難しさもあったが、最後まで切れ目のない災害救護活動を実施し、全員無事に帰任した。

熊本県での任務を終え、帰院した医療救護班第1班の救護員10名

日本赤十字社 Japanese Red Cross Society　徳島赤十字病院